



朝のこない夜はない

山首 鈴木正修

子どもに対してかける言葉

子どもとともに時間を過ごしていると、こんなことができるようになったのか、なんて感性が豊かなんだと驚かされることがよくあります。「親バカ」と言われようが、できることならば、子どもの得意なこと、好きなことを見つけて、そこを伸ばしてあげたいと考えるのが、親というものだと思います。偉人の中には、幼少期にかけられた親の言葉をじっと心に留めて、その才能を伸ばしたというケースも少なくありません。

漫画家の手塚治虫さんは、『鉄腕アトム』『ジャングル大帝』『リボンの騎士』『火の鳥』『ブラック・ジャック』など数多くのヒット作を世に送り出しました。ど



の作品も時代を越えて愛されており、「漫画の神様」と呼ばれるにふさわしい功績を残しています。アニメーションの制作においても革命を起こしています。日本最初のテレビアニメ『鉄腕アトム』の成功によって「テレビアニメ時代」が到来したのです。

アトムは世界にも飛び出しました。アメリカでは『アストロボーイ』と改名されて放映され、その後、イギリス・フランス・西ドイツ（当時）・オーストラリア・台湾・香港・タイ・フィリピンなど、世界40カ国以上で放映されました。ちなみに、アメリカでは、当時ニューヨークの6時半から7時の時間帯で最高視聴率を記録しています。

このように日本の漫画界に金字塔を打ち立てた手塚さんですが、その才能を伸ばしたのはお母さんです。手塚さんの豊かな発想力に気づいたお母さんは「民話」や



「おとぎ話」^{ばなし}、自作の^{じさく}「創作話」^{そうさくばなし}、時には「漫画」^{まんが}を毎^{まい}晩^{ばん}、情感^{じやうかん}たっぷりに手塚^{てづか}さんに読み聞^{よき}かせたそうです。

手塚^{てづか}さんが言^いっています。

「小さい子^こどもは、口伝^{くちづた}えで物語^{ものがたり}を聞^きかせてもらうとよく心^{こころ}に残^{のこ}るものです。話^{はなし}を聞^ききながら、イメージで頭^{あたま}の中^{なか}にその場面^{ばめん}とか、出^でてくる人間^{にんげん}の姿^{すがた}とか表情^{ひようじよう}を見るこ^ことができるのです」

小学生^{しょうがくせい}になると手塚^{てづか}さんは、自分^{じぶん}で話^{はなし}を作り漫画^{まんが}を描^かくようになりですが、先生^{せんせい}に見^みつかり、こっぴどく叱^{しか}られ、お母^{かあ}さんが呼^よび出^だされました。帰宅^{きたく}したお母^{かあ}さんが手塚^{てづか}さんに言^いいました。

「どんな漫画^{まんが}を描^かいていたのか見^みせてちょうだい」

手塚^{てづか}さんのノートをじつくり見^みて、お母^{かあ}さんは言^いいました。

「治^{おさむ}ちゃん、この漫画^{まんが}はとてもおもしろいわ。お母^{かあ}さん



はあなたの漫画の、世界で第一号のファンになりましたよ。これからお母さんのために、おもしろい漫画をたくさん描いてね」

お母さんの言葉を受けて、ますます創作に励んだ手塚さんは、その一方で大阪帝国大学付属医学専門部（現大阪大学医学部）に通い、医師免許を取得。在学中から漫画家として活動していましたが、やがて両立に苦しむようになります。手塚さんがお母さんに相談すると、「あなたは漫画と医学とどっちが好きなの？」と聞かれ、手塚さんが躊躇なく「漫画です」と答えると、お母さんはあっさり「それなら、漫画家になった方がいいわ」と言いました。

当時は漫画家の地位が著しく低い時代でしたが、お母さんは手塚さんの夢を後押ししてくれたのです。

手塚さんは後年言っています。



「母はいいことを言ってくれたと思います。母のこのひ
こと けつしん
と言で決心がつき、本当に充実した人生を送ることがで
きました」

親の言葉は子どもの才能を育み、時に情熱をさらに燃
おや ことば こ さいのう はく とき じょうねつ
え上がらせるきっかけとなるのです。こういう親の言葉
たいせつ
の大切さは、偉人の家庭ばかりでなく、一般の家庭でも
いっばん かつてい
同じです。 おな

植草学園大学発達教育学部名誉教授の野口芳宏先生が
うえくさくがくえんだいがくはつたつきまういくがくぶめいよきまうじゆ
ある講演で小学生の作文を読まれました。

ぼくはお母さんに「子どもの頃、何になりたかった？」
き
と聞きました。するとお母さんは「いろんなものになり
かあ
たかったよ。レストランに行くと ウェイトレスさんにな
なりたいたいな」と思ったし、クリーニング屋さんに行くと



グリーンング屋さんって素敵だな^{おも}と思ったし、バスに乗^のって旅行^{りょこう}に行くと、バスガイドさんになりたいな^{おも}と思ったわよ」と言^いいました。「ああ、そう。じゃあ、お母^{かあ}さんの夢^{ゆめ}は叶^{かな}わなかったんだね」とぼくは言^いいました。するとお母^{かあ}さんは「そんなことないわよ。全部^{ぜんぶ}、叶^{かな}ったわよ」と言^いいました。ぼくは驚^{おどろ}いて「どうして？」と聞^きき返^{かえ}しました。お母^{かあ}さんは「だって、お父^{ちち}さんのワイシャツにアイロンをかけている時^{とき}はグリーンング屋^やさんになった気分^{きぶん}だし、ドライブの時^{とき}に隣^{とな}で地図^{ちず}を広^{ひろ}げているとバスガイドさんになった気分^{きぶん}よ。あなた達^{たち}の食器^{しょくき}をテーブルに並^{なら}べる時^{とき}はウェイトレスさんになった気分^{きぶん}よ」と言^いいました。ぼくは大人^{おとな}って偉^{えら}いなあ^{おも}と思いました。

野口先生^{のぐちせんせい}は言^いわれます。



「『お母さんの夢は叶わなかったんだね』と言われた時に『そうなの』と言った答え方もできたと思います。しかし、このお母さんは『夢が全部叶った』と言うのです。このお母さんの物の見方、考え方がすばらしい。人が幸福を感じられるかどうかはその人の人生観によります。こういう人生観を持つ親に育てられる子どもは幸せだと思います。子どもが親や先生に問いかけた時、子どもの心は『どんな言葉が返ってくるのだろう』と全開になっています。その全開になった心にどんな言葉を送るのかがとても重要です。すばらしい言葉が子どもの心を育てていくのです」

熊本いのちの懇談会顧問の野尻千穂子さんという方がいます。野尻さんは12歳の頃、圧迫性脊髄炎という病気になり、それ以来胸から下が動かなくなり、ずっと車椅子



子の生活せいかつをしておられます。20歳さいの時ときにお見合みあいをされました。その相手あいての男性だんせいは両足りょうあしの股関節こかんせつがなく、歩くあるのが不自由ふじゆうな方かたでした。二人ふたりは、結婚けっこんすることになりました。そして野尻のじりさんは妊娠にんしんされました。周まわりの誰だれもが産うむことに反対はんたいしました。ご主人しゅじんだけはとても喜んで「産うんで欲しい」と言いいました。野尻のじりさんはお腹なかの赤あかちゃんに「お父とうさんが産うんで欲しいと言いっているから、二人ふたりで頑張がんばろうね」と語かたりかけたそうです。そして奇跡きせきといつても良よいと思おもいます。十カ月じゅうがつ後に無事ぶじに自然分娩しぜんぶんべんで出産しゅっさんされました。両親りやうしんは赤あかちゃんに「さおり」という名な前まえをつけました。

さおりちゃんが11歳さいになつた誕生日たんじょうびの日ひ、お母かあさんに質問しつもんをしました。

「お母かあさん、私わたしが生まれた時とき、うれしかった？」

それに対して野尻のじりさんは「うれしかったよ。とっても



とってもうれしかったよ」と答えました。それを聞いて
さおりちゃんは、「ああ、この世に生まれてきてよかった
た」と言ったそうです。

その後、野尻さんは「さおりに捧げる詩」という一文
を作り、さおりちゃんに贈りました。

「さおりちゃん、あなたが私のお腹にやってきたとき、
それは戸惑いからの出発でした。誰もが私の体を心配し、
宿ったばかりの小さな命は嵐にもまれて揺れる小舟のよ
うでした。愛すればこそ、産むのを止める人の心を知り
ながら、それでも私は『新しい命を世の中に出してやり
たい』と泣きました。あなたのパパが『産んで欲しい』
と言ってくれた時、あの喜びの心を表すほどの言葉を私
は知りません。たくさんの不安の中で迎えたあなたとの
出会いの朝、それは思いがけず、お腹を切ることなく迎
えられ、あの愛おしい産声は今でも忘れません。初めて



あなたを見た時、神さまの微笑みを感じました。どんなに辛くても産む道を選んだあの日から、数えきれないほどの幸せを持ってあなたは私達のもとに来てくれたんです。そんなあなたに私はいつも感謝しています。あれから11年、今年の誕生日に『ああ、この世に生まれてきてよかった』と微笑むあなたと出会えた日、世界中で一番幸せな父と母になりました”

野尻さんは言われます。

「世の中のお父さんお母さん、ご自分のお子さんと初めて対面した時、もう他に何もいらないううくらい親になれて幸せでしたよね。ぜひ、その時の気持ちを時々思い出しながら、子育てしていただきたいと思います。子どもには個性がありますから、親の思い通りにならないうことが多くと思います。でも親はこんな人間になつて欲しいという願いを話し、子どもを抱きしめながら



『あなたの親おやになれてよかった』と感謝かんしゃの気持ちきもちを話し
てあげて欲しいほと思います

野口先生のぐちせんせいの講演こうえんにお話を戻はなじします。子どもが親おやや先生せんせい
の言葉ことばによって逆さかにどんなに辛い思いおもをすることがある
か、野口先生のぐちせんせいがご自身じしんの体験たいけんを語かたっておられます。野口
先生せんせいは子どもの頃から歌うたが大好きだいすだったそうです。しか
し、あまり上手じょうずな方ほうではなかったそうです。中学2年生ちゅうがく ねんせい
の時に通知表つうちひょうを見たら、音楽おんがくが2でした。その2という
数字すうじにシヨックを受けうけ、音楽おんがくの先生せんせいのところに通知表つうちひょうを
持もって行って、「これは何かの間違まちがいではないですか？」
と尋ねると、「そうだよ。本当ほんとうは1にしたかったんだけ
どね。テストがまあまあできていたから2にしたんだよ。
何しろ君きみの歌うたはひどいからね」と言いわれたそうです。こ
のひとで野口先生のぐちせんせいは、人前ひとまえでは一生涯歌いつしやがわなないぞ」と



おも
思ったそうです。それ以来、本当に人前では歌っていないそうです。

野口先生は言われます。

「もしあの時に『2をつけたけど、本当は3にしたかったんだ。音痴でも練習すれば上手になるよ。毎日大きな声で歌っていればきっと次は3がもらえるよ』とでも言われていれば、ちよつとは救われていたかもしれない。下手でしたが私は本当に無類の歌好きで、小さい時から年中歌を楽しく口ずさんでいたんです。でもあの一件から一切口ずさまなくなりました。言葉は心に大きな影響を与えます。人間が生きていく上で支えになったり、励みになったり、またその逆になったりするのは」

野口先生の講演からイタリアのオペラ歌手、エンリコ・カルーソーの話を思い出しました。20世紀の初めに大



活躍かつやくをしたテノール歌手かしゅです。一時期じき、三大テノールだいだいが世界中せかいじゅうで大人気だいじんきでした。ドミング、カレーラス、パヴァロッティパヴァロッティです。カルーソーは、その三人にんを合わせた以上いじょうに人気にんきのあったテノール歌手かしゅです。その美声びせいは神の賜物たまものと言いわれましたが、48歳さいの若さわかで病氣びょうきで亡なくなりました。カルーソーの病氣びょうきを知しった世界中せかいじゅうのオペラファンが、彼の病氣びょうきが快復かいふくするように何万回なんまんかいとミサを行おこなったといひます。

実はじつカルーソーは、元々もともと声こえがあまり良よくなかつたそうです。でも歌うたうことは大好だいすきでした。子どもこの頃ころのある日ひ、音楽おんがくの先生せんせいが「君きみの歌うたはダメだね。高音こうおんが出でないし、声自体こゑじたいが良よくない」と散々さんざんなことを言いいました。実際じっさい、それから繰くり返かえし練習れんしゅうするのですが高たかい声こゑがなかなか出でませんでした。高たかい声こゑを出だすと声こゑが割われてしまうのです。それがどうして神かみの賜物たまものと言いわれるほどのテノール歌手かしゅ



になったのか、理由があります。

カルーソーの家は非常に貧乏な農家で、お母さんは21人の子どもを産み、その内の18人が幼くして亡くなってしまいました。残った3人の内の一人がカルーソーでした。お母さんは特にカルーソーを可愛がり、この子には天賦の才能がある、と信じていました。人生で唯一の楽しみはカルーソーの歌を聴くことでした。

カルーソーが学校の先生に散々言われた時、家に帰ってお母さんに泣いて「こんなことを言われた」と言いました。するとお母さんは「先生が何と言おうと、あなたの声は私には天使の声に聞こえるよ」と言ったそうです。お母さんはカルーソーが15歳の時に亡くなりました。カルーソーはお母さんについて、「母は本当に僕のことを愛してくれて、僕を歌手にしようとして、靴も買わずに裸足で過ごしたんだ。僕のために生きてくれたんだよ」



と涙を流しながら語っています。

お母さんが亡くなってから、お母さんの写真を肌身離さず持って、昼間は工場で働いて、夜は歌の勉強をしました。必ずお母さんの写真に向かって、毎日歌を歌ったそうです。お母さんの言葉と不断の努力の成果でしょう。いつしか、カルーソーの割れた声が神の賜物と言われるほどの美声に変わっていたのです。そして世界一のテノール歌手になったのです。

こんなエピソードがあります。カルーソーは駆け出しの頃とてもあがり症で、なかなか実力が発揮できませんでした。ある時、オペラの主役が急病で出演できなくなりました。カルーソーに代役を頼みに支配人がやってきました。その時にカルーソーは、もう自分の出番はない、と思いい、お酒を飲んで酔っ払っていました。支配人に「酔っていてもいいからとにかく出てくれ。お客さんが



待^まっているから」と言^いわれ、急^{きゅう}遽^{きょ}出^{しゅ}演^{えん}しました。

その後^ご、主^{しゅ}役^{やく}が病^び氣^きから回^{かい}復^{ふく}して舞^ぶ台^{たい}に出^でると、「駄^だ目^めだ。あ^の酔^よっ払^{はら}いを出^だせ」と観^{かん}客^{きゃく}が言^いったそうです。

そこで支^し配^{はい}人^{にん}に「とにかくお客^{きやく}さんがお前^{まえ}がいいというから、お前^{まえ}がやれ」と言^いわれ、それからカールソーは自^じ信^{しん}をつけて主^{しゅ}役^{やく}が張^はれるようになったというのです。

一^{しゅ}種^{げん}の験^{けん}担^{たん}ぎだと思^{おも}いますが、世^せ界^{かい}的^{てき}なテノール歌^{かしゅ}手^たにな^なってからも、必^{かな}ず舞^ぶ台^{たい}の前^{まえ}にはウイスキーソーダを一^{ぱい}杯^{はい}飲^のんでから出^でていたとい^いうこと^{こと}です。

お母^{かあ}さん^おの思^{おも}いと言^{こと}葉^はによ^よってカールソーは世^せ界^{かい}一^{いっ}のテノール歌^{かしゅ}手^たにな^なったの^{こと}です。

言^{こと}葉^はは大事^{だいじ}です。特^{とく}に親^{おや}から子^こどもへ^への言^{こと}葉^はは大事^{だいじ}です。

